

「画像診断のための知っておきたいサイン」

慶応義塾大学講師 甲 田 英 一
済生会中央病院医長 古 寺 研 一 著
慶応義塾大学助教授 平 松 京 一

聖路加国際病院院長
野辺地 篤 郎

甲田英一、古寺研一および平松京一の3氏による「画像診断のための知っておきたいサイン」は既刊の「計測値」に次ぐ3部作の中の第2部である。サインの定義をどこに置くかによって、この種の本の中にどれほどのX線所見を組み込むべきかが決まると思う。

私がこの本を初めて見たときに、正直なところ、この本に収められている項目のあるものについては抵抗を感じた。例えば A-V shunt で、これがサインと呼ばれるにふさわしいものなのだろうか？ ここまで含めなくてもよいのと思った。しかし、サインだけではX線診断に必要な所見あるいは情報をそろえられないからかもしれない。

実はこのことは著者らが序文の中で Meschan の Analysis of Roentgen Signs や、Reeder & Felson の Gamuts in Radiology で扱われている Roentgen Signs だけでは日常の診断、特に単純撮影だけでなく造影検査までを含めた場合に、日常の診断のための知識としては不足であるということで、純粋なX線所見以外のサインも取り上げているのが本書の特長である。

このようなことがわかってみると、この本は数多くのサインの中から、日常の診断業務に必要なものを上手に選び出しているように思われる。個々の所見（サインという言葉が適当でない場合がある——例えば alveolar pattern はどう考えてもサ

インではないように私は考える）について、それぞれ文献がついているのは大変親切である。しかもそれが必ずしも一番最初に報告あるいは記載された論文ではなくて、教科書を多くしていることは大変よいことだと思う。

幾つかの気になったものの中に sawtooth appearance がある。説明には鋸歯状変化と書かれていて文献がないが、これはまさに英語を日本語訳しただけのことであって本書で扱うべきではないのではないかと考える。病変なのか病因なのか、少なくともX線所見としては病因に起因する変化と考えたほうがよいと思ったものに mucoid impaction があるが、これは考え方の違いであろう。

いろいろと書いたが、とにかく本書は著者らが企画しておられる3部作の1つとして、よくここまでまとめられたものと感心させられた。これはまさにX線診断学の基本的な教科書ということが出来る。X線診断学はここから始まる。

A 5 判 248 頁 図 196 1983 年
¥ 3,600 円 300

医学書院 刊